

在宅要介護高齢者の主観的QOLを向上させる要因に関する研究

理学療法学科 新岡大和

1. 緒言

- 老化や廃用が進行する高齢者のQOL評価には、健康状態が反映されるようなQOL評価だけでなく、日常・人生に対する満足度や充実度を表す“**主観的QOL**”が重要。
- 研究責任者はこれまで**横断調査**で通所リハビリテーションを利用する要介護高齢者の**主観的QOLに関連する要因が抑うつとソーシャルスキル**であること報告した[2014, 新岡].

本研究の目的は**縦断調査**によって通所リハビリテーションを利用する**要介護高齢者の主観的QOLに影響を与える身体的・心理的・社会的要因を明らかにすること**である。

2. 方法

対象: 2014年に実施された初回調査で協力が得られた51名のうち、追跡調査時に取り込み基準を満たした34名。

調査・方法: 2017年8月から9月に身体機能測定と自記式アンケート調査を実施。

調査項目:

- <基本属性> 年齢・性別・要介護度・MMSE・趣味の有無
- <身体的要因> CS-30・5m移動時間・疼痛・FIM-m
- <心理的要因> GDS-15・SF-8
- <社会的要因> LSNS-6・KISS-18
- <主観的QOL> LSIK

統計的解析: 結果の正規性を確認後、追跡調査時の主観的QOLに関連する要因、また、追跡調査時の主観的QOLと関連する要因を明らかにするために単相関分析と重回帰分析(ステップワイズ法)を実施した(有意水準5%)。

3. 結果・考察

表1 追跡時の主観的QOLを従属変数、追跡時のその他の変数を独立変数とした重回帰分析結果

	非標準化係数		標準化 b	t	有意確率 (p)	β の 95.0% 信頼区間		VIF
	β	標準誤差				下限	上限	
定数	8.836	1.393		6.346	.000	5.996	11.677	
KISS	-.108	.029	-.557	-3.735	.001	-.166	-.049	1.000

ANOVA $p < 0.01$ $R = 0.557$ $R^2 = 0.310$ 自由度調整済み $R^2 = 0.288$

表2 追跡時の主観的QOLを従属変数、初回時のその他の変数を独立変数とした重回帰分析結果

	非標準化係数		標準化 b	t	有意確率 (p)	β の 95.0% 信頼区間		VIF
	β	標準誤差				下限	上限	
定数	8.802	1.274		6.912	.000	6.208	11.397	
KISS	-.106	.026	-.585	-4.083	.001	-.159	-.053	1.000

ANOVA $p < 0.01$ $R = 0.585$ $R^2 = 0.342$ 自由度調整済み $R^2 = 0.322$

追跡調査時の主観的QOLに影響を与える要因は、追跡時・初回時ともにソーシャルスキルを表すKISS-18が採用された。**主観的QOLに影響を与える要因は横断調査時・縦断調査時とも変化がなかったことが確認された。**

4. 課題

重回帰式の適合度はいずれの回帰式も低かった

- ✓ 主観的QOLに影響を与える他の要因を検討する。
- ✓ 標本数を増やして確認する。